ＦＩＡ研究会の発展を願って

山梨大学工学部　深沢　力

フローインジェクション分析(FIA) 法が知られるようになってから１０数年にもなるだろうか。我国でもこの方面に関心が高まり、研究が活発になるとともに、1984年 1月本研究会が発足し、世界初めてのこの方面の専門誌として J.Flow Injection Anal.が発刊された。これが契機となり我国の研究を刺激し発展を促した。以来今日まで講演会は年２回通算１３回まで開催された。雑誌のほうも年２回欠かさず刊行され、総説、研究報告をはじめ世界中のFIA に関する学会、文献等の情報まで掲載され、外国研究者の投稿もあり、世界的に著名になって、掲載論文は Chem.Abs.にも引用されるようになった。以上のようなことから日本のFIA 研究は質・量とも世界的に評価され、来年は第５回目のFIA に関する国際学会が熊本で上野景平先生が代表になられ開かれることになった。国、州、地方自治体、議会といった学会と直接関係のないところですら、いろいろの形で積極的に援助し、外国から訪れた研究者たちを歓待してくれることの多いヨーロッパ諸国に比べ、関係ある公的機関や学会の後押しすらもなく、小さな研究会が日本で国際会議を開くことは並大抵のことではないように思う。加えて参加して欲しい外国人研究者の中には招聘したり、何らかの形で来日援助でもしないかぎり、世界的物価高の日本には来難い人が多い。時たま国内の小さな学会や討論会をお世話するだけでも大変なのに、どこの学会にも属さず独立に運営し、よくここまでおやり下さったと世話人代表、幹事、その他本研究会を推進し、お世話下さった先生方に心からお礼を申し上げたい。

一方、これまで日本のFIA 研究を担い、指導的役割を果してこられた初代の先生方は既に、または、そろそろ第一線を退かれるようになった。また、従来どの学会にも属さず独立の研究会であったものが、将来を考え本年４月から日本分析化学会の一研究懇談会となり、フローインジェクション分析研究懇談会と名称変更し、一層の発展を目指すことになった。このように考えてくると日本のFIA 研究は第２世代に入り、FIA 研究会も新しい時代を迎えることになり、これまでの発展の歴史、６年間の大きな積み重ねを基礎に、つぎの世代の方々の今後の充実した活躍、発展が期待される。

私どもは工業分析化学の立場からトレースアナリシスの一方法として反応速度法、特に接触法に関心を持った。古くから知られたこの方法が実用化しなかった理由や、昔と現在の分析化学のおかれた環境を考え、実用性を明らかにすることから始めた。ついで、感度や精度の向上と限界などについて研究しながらFIA に興味を持ち、接触反応を利用する立場から仲間入りさせて頂いた。しかし、接触反応を利用するにしても、FIA そのものを研究対象とする場のほか、明確に設定された目標に向かってその長所を取り入れていくような研究の場もあるかのようにおもわれ、その他今後の課題は多い。また、時代の新しい要求とともに、この際分析化学の歴史を考え、個々の方法の進歩発展の足跡と、古くからある方法の今日的意味や役割を改めて考え合せてみることも、今後のFIA 研究にとって無駄でないような気がする。